と畜検査でみられた牛の肺に転移が疑われた腺癌の一例

内田真輔[1)]　大西栄二[2)]　渡邉仁[1)]

1）香川県食肉衛生検査所　　2）香川県健康福祉部生活衛生課

【はじめに】腺癌は腺管への分化を示すもの、あるいは粘液産生が認められる悪性腫瘍で、牛では非常に珍しい病変であることが知られている。今回、牛で肺への転移が疑われる症例に遭遇したので、その概要について報告する。

【症例】牛（ホルスタイン種）、雌、131ヶ月齢、香川県内の農家から胃腸炎の診断名で病畜として搬入された。腹臥位で栄養状態は普通であった。

両肺実質の拡張が認められ、漿膜面及び割面に米粒～小豆大の乳白色の硬結部位が多数認められた。縦隔リンパ節に軽度の腫脹および硬結感が認められた。心臓の内腔は拡張し、肝臓はニクズク肝を呈し、小腸及び腸間膜に水腫が認められた。その他臓器に著変は認められなかった。

病理組織学的には、肺及び縦隔リンパ節実質に単層円柱の腺様構造や膠原線維の著しい増生が認められ、縦隔リンパ節ではリンパ小節は消失していた。また、腺様構造を構成する細胞に核の大小不同が認められ、腺様構造の管腔内にエオジンに強染する物質が認められ、一部で基底膜が崩れていた。病変部周囲では、リンパ球の著しい浸潤像も認められた。

免疫染色において、これらの腺様構造はケラチン陽性、ビメンチン陰性で、管腔内容物はケラチン陰性であった。PAS 反応およびアルシアン青染色（pH2.5）を行った結果、肺および縦隔リンパ節の腺様構造では、管腔内容物の一部は PAS 陽性およびアルシアン青陽性であったが、管腔を構成する細胞は PAS 反応、アルシアン青ともに陰性であった。

【考察】肺に小型で同程度の腫瘤病変が両側性にみられたことから、他の臓器からの転移が強く疑われた。結合組織が豊富な牛の腫瘍としては子宮腺癌や胆管癌の可能性が考えられたが、本症例では構造異型が高く、また、肺以外の組織を精査していないため原発部は不明であった。今回のように、肉眼病変に乏しい症例では精密検査後に転移が疑われる事例があるため、今後肉眼検査でさらなる精査が必要であると思われた。